

## 9 学生に「また来たい」と言われたい

～学生×地域×大学で考える学生目線のボランティア～

### ○開催目的

学生ボランティアは「どうしてうちの団体には来てくれないの?」「単発で終わりがちなのか?」

学生の参加を広げ、継続につなげるために、受け入れ団体やボランティアコーディネーターは、どのような関わり方やプログラムの工夫をすればよいのでしょうか。

この分科会では、地域活動団体「ぎんなん会」の活動をモデルケースに、この活動に携わる学生の想いと受け入れ団体との関わりを通じて、学生目線になって考えます。

※ ぎんなん会とは、杉並区立済美養護学校の生徒（以下、「会員」）の卒業後の進路を案じた保護者が集まり、生徒の自立と就労を目指して、試行錯誤で始まった活動です。30年間の歴史があり、現在では会員のニーズに合った、余暇を過ごす場としても活動しています。明治大学のボランティアサークルしいの実は継続して、この活動に参加しています。

### ○開催日時

2月13日（土）10:40～13:10

### ○参加者数・出演者・団体

参加者数：39名（参加者31名、出演者4名、スタッフ4名）

出演者・団体：

【ボランティアに取り組む学生】

土屋 弦さん（心身障害者福祉会しいの実／明治大学2年）

渡辺 絢香さん（心身障害者福祉会しいの実／明治大学2年）

【地域活動団体】坂野 和枝さん（しいの実受け入れ団体／ぎんなん会代表）

【コーディネーター】

西川 正さん（NPO法人ハンズオン！埼玉 常務理事／埼玉大学非常勤講師）

### ○プログラム内容・成果と課題

【プログラム内容】

#### 1 導入のワーク

- 参加者に、「学生ボランティアの位置付け」、「どうして学生ボランティアに来てもらっているのか」、「学生を受け入れるにあたって気をつけていること」について考えてもらい、「分科会で聞きたいことや悩み」を提起してもらいました。

#### 2 坂野和枝さんから地域活動団体「ぎんなん会」の活動概要や学生ボランティアと接するにあたり気をつけていること等について伺いました。（以下、一部紹介）

【活動の関係性と学生ボランティアの位置付け】活動が保護者、会員、ボランティ

ア、顧問教員相互の関係性の中で一種の社会として成り立っており、学生ボランティアは保護者でも教員でもない社会人として位置付け、会員の環境を広げてくれる存在としての役割を期待している。

【ボランティアとのコミュニケーション】ボランティアとのコミュニケーションを大切にして、活動中はボランティアと会員の動きを見守り、失敗したことや悩んだことは持ち帰らずに話してもらうようにする。活動中の保護者とのコミュニケーションを通じて自らの人生像を描く人もいる。

【フィードバック】ボランティア研修会や合宿では懇親会を開催し、会員の支援の仕方を共有する。

【理由を話すこと】会員との関わりのなかで、4年間のなかで結果は出ないかもしれないが、関わりつづけることが大切であると伝える。

【学生の学び】例えば、活動を通じて大きな声で自分の意見をいうことが就職活動につながるなど、結果として学生の学びにつながっている。

### 3 ボランティアに取り組む学生の土屋弦さん、渡辺絢香さんから継続して活動に参加している理由や魅力について伺いました。（以下、一部紹介）

【ボランティアの居場所】ボランティアを「一個人」として観てくれる、見守ってくれる雰囲気や「目の前の学生を育てよう」という意識を感じる。

【フィードバック】活動参加後のボランティア研修会、懇親会や反省会でのフィードバックがあること。

【関係性と継続要因】活動に参加していくことで、ボランティア同士や、保護者、会員との関係性が生まれ、そのやりがいや楽しさがボランティア活動の継続につながっている。

## 4 質疑応答

- ・「ぎんなん会」の事例報告を受けて、学生の主体性や積極性を引き出すための工夫や情報提供の在り方等といった更に発展した議論ができました。

## 5 まとめのワーク

- ・分科会の感想の共有（「参加者の声」参照）



### 【成果と課題】

地域活動団体と、実際に活動に参加している学生の報告を通じて、学生ボランティア

の位置付けやフィードバックの重要性など、学生の継続した活動につながる基礎について共有することができました。さらに、どうすれば学生の主体的な活動につなげていくことができるか等にも議論を広げていくことができました。

この分科会の成果を各団体に持ち帰り、学生の継続した活動へつなげていくことを期待しています。また、参加者には学生ボランティアの積極性を高める工夫について関心を持っている方も多く、次のステップとして、そのような議論の場を設けていきたいと思えます。

## ○参加者の声

- ・参加している学生の生の声、受け入れ先との関係が良く分かり、とても良かったです。
- ・安心感→居場所→主体性、というまとめに、しっかりしました。
- ・フィードバックという共通の主題について学べた。その形として、関係性の中で生まれるボランティアの成長を見守る受け入れ側の視点を知れたのは、ボランティアとして関わるなかで非常に有意義でした。
- ・フィードバック、居場所づくりも意識した団体を目指していけるかな？と思うことができた分科会でした。
- ・自分たちの取り組みを改善すべき要素が明確になりました。また、いくつもの改善案を考える事ができました。
- ・学生が自ら成長を感じ取ることができ、それを受け入れ側も実感しています。大学としては、これをいかにコーディネートするかだと思います。整理して次につなげたいです。



## ○担当者・記録

《担当》	芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）
	遠藤 信裕（なぎさ和楽苑）
	辻 陽一郎（國學院大學ボランティアステーション）
	土屋 弦（心身障害者福祉会しいの実／明治大学 2 年）
	柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）
《記録》	芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）